詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

春障子閉めて轆轤の音の消ゆ
川越市　大野宥之介

△評▽変わりやすい春先の天気、作業場との距離など、さまざまな想像が広がる。ろくろを止めたわけではないだろう。

休日のやうな錯覚春の雨
小田原市　林　梢

△評▽春雨に降り包まれた静かさ、家族の行動の緩やかさが今日は休日かと思わせたのだ。

裏山に獣の臭ひ雪解風
千葉市　畠山さとし

あたたかやいつしか消えし蒙古斑
秦野市　安藤　泰彦

御座船の触れてゆきたる柳の芽
神戸市　田中　忠士

真夜にして仄明りあり雛屏風
東　京　望月　清彦

蝶々の恋のはじめの縺れ合ひ
横浜市　斎藤　山葉

山雨来て初蝶しどろもどろかな
浜松市　久野　茂樹

青空にたちまち吸はれしやぼん玉
川口市　高橋さだ子

玉子焼一皿足して雛祭
奈良市　伊東　勝

井上　康明　選

百年を経たる校歌や山桜
町田市　枝澤　聖文

△評▽入学式だろうか、100年の歴史がある学校の校歌が聞こえてくる。傍らの山には、山桜が気高くすがすがしく咲いている。

解体のビルに舞ひたる春の雪
相模原市　はやし　央

△評▽老朽化したビルが解体されている。それをいたわるかのように、春の雪は降りつづく。

息入れて紙風船は虹の色
葛城市　久保　政子

亡き人とすれ違ひたり沈丁花
東　京　山野ゆかり

引越しの最後の荷物シクラメン
土浦市　今泉　準一

白杖のさきに膨らむ桜かな
明石市　島谷喜代孝

笹鳴が頻りに我を呼ぶ故郷
唐津市　梶山　守

土筆摘む人と会釈を交したり
津　市　秋山　歩荷

眠たげなポニーの睫毛花菜風
相模原市　小山　鞠子

ハム入りの母のチャーハン春休
三条市　甘　辛

片山由美子　選

鶯や声の辺りに目を凝らす
和歌山　馬谷富貴子

△評▽声はしてもなかなか姿を見せないウグイス。「声の辺り」に実感があるが、果たして見つけることができただろうか。

風光る子育て中は髪切つて
羽生市　今成　公江

△評▽長い髪を整えている時間もない生活。季語の「風光る」が生き生きとした姿を思わせる。

せせらぎの音のまばゆき猫柳
町田市　枝澤　聖文

こころもちやつれ顔なる男雛かな
奈良市　伊東　勝

捨て子猫首によく鳴る鈴つけて
和歌山市　曽根　澄子

降るとなく止むとなく降り春の雨
高　知　渡辺　哲也

波のごと去つて行きたし実朝忌
出雲市　石原　清司

農道が子の通学路花なづな
北九州市　篠原　敬祐

水温む用水路にも動くもの
和歌山市　福本　秀昭

筍を兜のごとく並べ売る
明石市　島谷喜代孝

小川　軽舟　選

鐘声は明暦の世より冴え返る
延岡市　九鬼　勉

△評▽明暦の大火の後に建てられた鐘楼の鐘なのだろう。死者10万人余りという江戸の大惨事が急に身近に感じられる。

みづうみに水没林の芽吹きかな
東　京　嶋田　恵一

△評▽雪解けで湖が増水すると水没する林がある。それでも芽吹く自然の力が頼もしい。

囀やコップの底にひかりの輪
龍ケ崎市　小宮　光司

菜の花や櫂を離るる渦小渦
東　京　伊藤　公一

すれ違ふいづれの顔も春めける
岡山市　仲野　恒彦

ハングリー精神は死語猫の恋
千葉市　木村　史子

春昼や路地に影置く車椅子
東　京　符金　徹

春寒し千円札を足す財布
大野城市　野分　のわ

帰宅せり妻撒きし豆踏まぬやう
茅ケ崎市　加藤　西葱

先生の白きコサージュ卒業歌
奈良市　荻野　隆子

「うたは奏でる」

静かな歌

染野太朗

以前もこの欄で訴えたはずだが、環境や人間関係が大きく変化する春は明るいばかりでなく、やはり落ち着かない季節でもある。せめて静かな歌が読みたい。

・地上までまだ少しある踊り場に桜の花が散らばっていた　嶋稟太郎

上の句の表現だけで、この人が地下から階段をのぼっているということがわかる。省略がよく効いている。「散らばる」という動詞の選択も、単純なようだが実は絶妙で、そこに点々と散っている花びらの様子を、映像として過不足なく伝える。都市空間の桜という感じがする。句割れや句跨りのない、定型ぴったりのたっぷりとした言葉運びからも静けさが感じられる。

・ほったらかしにされてうれしい日なたみず三月の花をうかべていたり　齋藤芳生

「日なたみず」とは日向にある温かくなった水のこと。上の句はどちらかと言えばにぎやかだと思う。初句の促音「っ」や字余りを中心とするはずんだ調べが、いかにもそのうれしさを表している。一方で下の句の、花と水が春の日差しに輝く様子はとてもおだやかだ。

右に挙げた2首とも、「ていた」「ていたり」という補助的な表現でゆったりと閉じられており、その感触も静謐な印象に影響しているはずだ。

・春のなかできみが泣いてる　階段はとてもみじかくすぐに終わった　永井祐

階段を行きながら泣いていたのか。どこか即物的な印象を残す歌だ。「きみ」への眼差しに、あたたかくも冷たくもあるような、ふしぎな静けさがある。

（そめの・たろう＝歌人）